

# 現代フランス語の受動表現について

Les expressions du passif en français contemporain

林 迪 義  
Mitchiyoshi HAYASHI

当学会の第23回大会で「ロマンス語における受動の表現形式」が統一テーマにかかけられた。このテーマの下で現代フランス語について行った研究発表の内容を会場での質疑をふまえて整理しておく。

受動の表現形式というかぎりは、受動態の手順にとどまらず、*il a subi des injures. \_ cela fait l'objet d'un examen minutieux* のような語彙的形式も含まれるが、ここでは、範囲を広げずに統辞法上の形式だけを見ることにする。

## 1. 過去分詞による迂言形

フランス語における受動態が

### (1) Paul est remplacé par Jean

のように être + p.p. で表わされることは他の主要ロマンス語と共通である。過去分詞は形容詞と同じく名詞の規定語の性質をもち、être は人称動詞として先行名詞を主語に立て、同時に繫辞として過去分詞を主語の属辞としてみちびく。繫辞は être に限られず se voir も用いられる。

### (2) Paul se verra remplacé par Jean

受動文には、「家を水浸しにされる」とか、「砲弾で腕をやられる」とかのように、主語が人である、動作を直接受けるものはその身体部位や持ち物であり、主語はそのような事実をこうむる者である場合がある。このような複合受動の文では繫辞に他動詞 avoir または voir が用いられ、過去分詞はその目的補語の属辞となる。

### (3) Le soldat a eu l'avant-bras broyé par un obus.

### (4) Il a vu sa maison inondée.

ところで être + p.p. の形式は、動作を受ける者がその結果としての状態にあることを示すことがある。

### (5) Cet homme est blessé.

### (6) La montagne est couverte de neige.

ここでは過去分詞は形容詞に接近し、主語についてその静止的なあり方を述べるものとなっている。しかしこれはすべての動詞について見られることではない。

TOGBY (1983) は *verbe perfectif* と *verbe imperfectif* とを区別し、そこからこの問題に光をあてようとしている。v. perfectif とは動作を受けたものが新しい状態になることによって完成する動作、限界が認められる動作を表わす: *fermer* (la porte est fermée = n'est plus ouverte), *guérir* (l'enfant est guéri = n'est plus malade) など。v. imperfectif とはその過程に完了の限界をもたない動作を表わす動詞である: *aimer*, *observer*, *interroger* など。この種の動詞ではつねに過程が示される。問題は v. perfectif にある。この種の動詞では être の時称が未完了の価値をもち、動作主が示されないという条件では状態が表わされる。

(7) 半過去 (imparfait) : Une heure après, la lanterne était allumée (§ 1098, 1)

(8) 現在 : Il n'a plus personne, il est ruiné (§ 1097.1)

反対に être の時称が完了の価値を持つときには過程が表わされるという。

(9) 現在 : Il est surpris, mais parvient à s'enfuir (§ 1097, 2)

(10) 単純過去 : Un an avant la guerre, je fus promis au poste de gouverneur de Syrie (§ 1099, 1)

(9), (10) で être の時称に完了の価値があるとされているが、このような文では動作は主語と一体となって一つの出来事を表わすものとなっているから、受動の事実が前面に出てくる。そして動作過程の aspekto は全く問題にならない。これに対して(7)や(9)では主語がその時点でどうなっているか、そのあり様が問われていると言える。ここでも時称が未完了の価値をもつというのではなく、問題は叙述の目的のちがいである。主語・動詞が一体となって事実を述べるか、それとも主語のあり方を述べるかによって分かれることである。

したがって、

(11) Le magasin est ouvert à 8 heures.

のように話者が特定の時点に焦点をおいてものを言っている場合、あるいは、

(12) La maison est construite en un peu de temps.

のように動作そのものの成立が考えられている場合には過程が意識される。反対に、幅のある特定の時期が前提となっているときには、「その時」主語がどういうありかたをしているかが述べられるから、動作の結果としての状態が前面に出てくる

(13) Le magasin est ouvert de 9 heures à 18 heures.

(14) La maison est construite, on peut emménager.

このことは verbe perfectif に限られず、verbe imperfectif についても言える

(15) Jean est gentil, il est aimé de tout le monde.

「状態」とは動作の内的過程の完了相である。(11), (12)でも動詞が完了相であることは変わらない。(11), (12)で「事実」が述べられているというのは、動作の過程の全体が一つの出来事として示されているということである。

(16) Cette étoffe-là se lave, mais celle-ci ne se lave pas.

## 2. 代名動詞の態

代名動詞は一定の条件で受動を表わしうが、それは能動の転換としての受動態ではない。物・事についてある動作が行われることを述べるのであるが、行為者は特定されず、つねに人一般である。

では二つの布地が洗うことを受付けるかどうかの判断が述べられているのであって、その動作が事実として生じることを言おうとする用法ではない。だから、

(17) \*Cette étoffe s'est lavée.

のように言えない。

また、主語について習慣的に認められる事実を示すときにも用いられる。

(18) Ce mot s'emploie souvent.

(19) Ce mot s'employait autrefois.

いずれにせよ、そのものにある動作が生じるかどうか、一種の可能性の判断を表わす用法であることにはかわりがない。特定の行為者があって生じた動作ではないから、次のように動作主補語を加えることは不可能である。

(20) \*Ce livre ne s'achète pas par les étudiants. Il est trop difficile.

cf. Ce livre ne se vend pas parmi les étudiants.

このような代名詞の用法は受動を含意しているが、中動態であることに条件づけられている。

### 3. 不定詞による迂言形

はじめにあげた例(1)に表わされているのと同じ事実は、

(21) Paul s'est fait remplacer par Jean.

のように *se faire + inf.* の形式を用いて言うこともできる。この形式は使役構文 *faire quelqu'un + inf.* から出たもので、*quelqu'un* に対する再帰代名詞が区別の標識である。これによって受動者は他者でなく自分であることが示され、動作主も主語ではなく外部のだれかであって使役の意味が消え、主語について受動の関係が表わされる。

他方、先の(3), (4)に見た複合的な受動がこの形式によっても表現される。

(22) Je me suis fait couper les cheveux par un ami.

(23) Il s'est fait voler sa bourse.

*se faire + inf.* の使用には主語が、その受ける動作を行為者に求めたことが含意される場合があり、これは動作の性質によって判断される。(22)は「友だちに髪を切ってもらった」に当るであろうし、

(24) Je vais me faire examiner à l'hôpital/vacciner/soigner...

などもそうである。また特に、

(25) Il s'est fait attribuer un prix.

のように主語がそれによって利益を得るような動作では、主語が能動的な行為者であって、同時に受動者でもある事実を表わすことがあり、これは一つ別の用法に数えられる。

こうした動作について主語が単なる受動者であることを表わすには、*se voir + inf.* の形式が用いられる：

(26) Il s'est vu attribuer un prix.

*se faire + inf.* の使用は一般に人を主語とする場合に限られる。

### 4. まとめ

現代フランス語の受動表現は、*être + p.p.* と *se faire + inf.* の二つの迂言形式に代表されるが、主語が人であって、それが直接動作の対象（能動態の直接補語に当る）であるときには2形が競合する。現に *il a peur d'être grondé / de se faire gronder* では差が出ない。しかし、*se faire + inf.* の形は二つの点で *être + p.p.* と異なる。

第一は主語がその受ける動作の発生に多少ともかかわりをもっていることが含意される点である。例を追加すると *elle est partie tôt, pour ne pas se faire gronder par son père* では、主語の人物の受けうる動作が彼女の行動にかかっている。また次は、ある男が殺されたという一つの事実に対して二つの受

動形式が選択されている例（雑誌の記事）である： Simon Bitton avait refusé de rester passif, d'accepter sans réagir une de ces agressions tristement banalisées. Il a été tué sur le coup par l'un des gangsters qu'il pourchassait. (...) Cet homme de 32 ans, restaurateur aux Buttes-Chaumont (...), s'est fait tuer parce qu'il n'a pas accepté cette violence (...) 後の se faire + inf. の文は「.....がために殺されるはめになった」とでも解釈できよう。主語の行為と受けた動作との間に関連性を認めた内容となっている。

第二はアスペクトである。être + p.p. は完了相であるが、se faire + inf は動作を未完了相で表わす。したがってアスペクトの点で例(1)に対応するのは Paul se fait remplacer ... でなく、Paul s'est fait remplacer ... である。また、いわゆる近未来 (je vais faire) のように動作・状態がこれから生じる様を示す形式に完了相である être + p.p. が連結しにくく、かわりに se faire + inf. が用いられるということがある。つまり Le chat va être écrasé par une voiture よりも Le chat va se faire écraser ... の方が自然な言い方であるということである。同様に主語が動作を進行中に他の動作を受けるような場合にも、完了相の être + p.p. でなく、se faire + inf. が用いられる。たとえば En sortant de l'église, Marie-Chantal est abordée par un mendiant なら無理のないなめらかな叙述であるが、En sortant de l'église, Marie-chantal se fait aborder par un mendiant では後の動作の表現が場面に適合しない。のないなめらかな叙述となる。

古典ラテン語の総合形が消滅した後、フランス語には受動態の現在未完了相が空白になっていたが、現代フランス語では se faire + inf. の迂言形式がこれを部分的に補充しているようである。

#### 参考文献について

引用した TOGEBY (1983) は Knud TOGEBY, Grammaire française, vol. III: Les Kormes impersonnellés du Verbe et la construction des verbes, Akademisk Korlay, Copenhagen.

être + p.p. 以外の形式をとりたてて論じた文献は見当たらない。わずかに DUBOIS, J., Grammaire structurale du français: le verbe, p.p. 123-124 あるいは GAATONE, D. "Le rôle de 'voir' dans les procédures de retournement de la phrase," Linguistics 58 (juin 1970) に触れられている程度である。se faire + inf. についての研究はインフォーマントの協力による筆者の不十分な調査の結果である。